

深江物語(1)

昭和20年代の駅前界隈を歩く

深江塾 森 口 健 一

二〇〇九年の深江文化村講演会をきっかけに生まれた深江塾では、地域住民のメンバーが毎月一回史料館に集まって、自らの体験や記憶を語り合い、街並みの記録を作成しています。また実際に町を歩き、痕跡を探し町の変化を見つめなおしています。今回は本庄村が神戸市に合併した昭和二十五年（一九五〇）前後の深江駅南界隈をテーマに、話し合った成果をまとめました。

西国浜街道と新道

昭和二十一年（一九四六）に国道43号線の都市計画決定がなされました。同時に今の深江の道路配置のもとになった復興計画決定もなされました。この復興計画が実施される以前の深江の道は、「新道」と西国浜街道の二本の道が東西に貫いています。

明治四十三年（一九一〇）の地図では、深江を東西に貫く道は西国浜街道が太く描かれているのに対し、新道は細く途中で途切れています。大正十二年（一九二三）の地図では新道は深江と芦屋の境である傍示川で浜街道と南北に分かれ、はっきりした道となります。二つの道は深江を西に向い本庄小学校手前、神戸高等商船学校（後の神戸商船大学、現・神戸大学海事科学部）正門前あたりで再び合流しています。新道は深江地区内の古くからあった道を利用して、新しく幹線道路として造られた道で、浜街道が未舗装だったこの頃に「新道」はアスファルト舗装の道路でした。

牛や馬が荷台を引く車も通行し、西宮の宮水を酒造メーカーに運

んでいました。歩道と車道の分離はなく人も車も牛も馬も混じって通行し、アスファルトの上に馬糞や牛糞が点々と落ちていました。

車と言っても乗用車は殆どなく、オート三輪（通称・パタコ）が目立ちました。昭和二十年代には、町を結ぶ幹線道路としては深江区間に限れば、浜街道ではなく「新道」でした。

昭和十三、四年ごろには神戸高等商船学校正門から国道2号線へ直線の幹線道路が出来ました。

大日神社と卯の花祭り

浜街道に面して北側に大日靈女神社（通称・大日神社）があります。大日神社本殿は、空襲にも焼けずに残りました。神戸高等商船学校の西の海辺にあった川西航空機（現・新明和工業）は、吸い上げポンプで海の砂をくみ上げ急造した埋立地に建造され、帝国海軍が世界に誇る二式水上飛行艇や戦闘機「紫電改」を製造していました。そのためこの地域は米軍のB29爆撃機による爆撃目標となり、広い範囲が爆弾や焼夷弾の被害にあいました。本庄村は昭和二十年五月十一日と六月五日、八月六日に空襲の被害を受け、八月六日には大日神社境内にあったダンジリ倉庫とダンジリを焼失しました。ダンジリ倉庫は白土壁造り、中二階があり江戸時代からのダンジリを解体して保管していました。

大日神社の例大祭は、「卯の花祭り」といいました。卯の花は初夏に咲くウツギの花の別名です。卯は四番目を意味し、月でいえば旧暦の四月です。そのため新暦五月の十九日を宵宮、二十日を本宮として祭りが行われました。この時期は瀬戸内では「魚島時」といって豊漁になる季節とされたそうです。深江の海も冬の漁から夏の漁に変わる区切りの時期だったのです。宵宮の十九日は本庄小学校の授業は午前中だけでおしまい。二十日の本宮はお休みでした。本家と言われる家には、お嫁に出た娘が孫を連れて帰り、遠くの親戚も

やつて来ます。それらの人々を迎える家の嫁は何かと準備に大変でした。

この頃はイチゴの季節でもありました。他所から祭りのために帰ってくる身内は、木箱に入ったイチゴを子どもたちにお土産として持ってきてくれました。イチゴはこの祭り時分だけの「季節の果物」でした。温室栽培などもなく、鳴尾辺りの農家が栽培したものが中心でした。

盆踊り

卯の花祭りに続く大きな行事は盆踊りです。境内に大きな櫓が組まれます。櫓の上にはお手本として小学生が踊り子となって踊ります。三味線太鼓が響き、深江の踊りの先生、黒田浜子さんが太鼓を

打ちました。

この三味線、太鼓に合わせて「深江音頭」や「深江小唄」が唄われました。作られたのは、昭和二十一年とも二十三、四年とも言われます。とくに深江音頭には戦災復興の願い希望が込められています。いずれも黒田清一さんが作曲、細野寛一さんが作詞、細野光子さんの三味線、黒田浜子さんの踊り振り付けで披露されました。

復興祭りとミス本庄

昭和二十五年十月に合併し、その月に神戸市の「みなと祭り」にあわせて「復興祭り」が神社を中心に挙行されました。ダンジリや神輿、鉦や太鼓は卯の花祭りにつき物ですが、このときの復興祭りには「ミス本庄」を選ぶイベントが行われました。「みなと祭り」

深江音頭

- | | |
|---|---|
| 1 深江よいとこ 潮風受けて ヨイヨイ
今日も出船か 勢ぞろひ
沖にや網船 ポンポ船
大漁大漁で戻り船
アリヤサットサット 戻り船 | 4 深江よいとこ ちぬの海 ヨイヨイ
恋の散歩も 白浜ふんで
沖のかもめや 浜千鳥
甘いささやき 波の上
アリヤサットサット 波の上 |
| 2 深江よいとこ そよ風受けて ヨイヨイ
六甲降りれば 復興町
軒並みそろへて 大繁昌
栄え栄えて 明けて行く
アリヤサットサット 明けて行く | 5 深江よいとこ 朝日を受けて ヨイヨイ
今日も工場で 槌の音
稲も豊作 黄金波
皆んな笑顔で暮れて行く
アリヤサットサット 暮れて行く |
| 3 深江よいとこ 六甲のおろし ヨイヨイ
高い高橋 踊り松
卯の花祭の お神輿を
浜の戎さんが 手で招く
アリヤサットサット 手で招く | 6 深江よいとこ 復興は進む ヨイヨイ
踊り踊れば 彼(あ)の娘は唄う
歌え踊れや 朗らかに
手並みそろえて深江音頭
アリヤサットサット 深江音頭 |

深江小唄

- | | |
|---|--|
| 1 深江名所は踊松
高い高橋 片葉草
卯の花祭りの伊達姿
末は鶴亀 五葉の松
澄んだ青空 磯の松
波はさざ波 白帆が見ゆる
粋な姉さんの艶姿
につこり笑えば 片えくぼ
今日は東風(こちかぜ) 出舟の支度
向ふ鉢巻 玉の汗
エンサエンサの勇み肌
続く大漁で 大賑
白い砂浜 恋の夜
好いた同士の忍び逢い
彼(あ)の乙女(こ)の姿が浜千鳥
何に啼くのか 帰る雁 | 2 深江小唄
高い高橋 片葉草
卯の花祭りの伊達姿
末は鶴亀 五葉の松
澄んだ青空 磯の松
波はさざ波 白帆が見ゆる
粋な姉さんの艶姿
につこり笑えば 片えくぼ
今日は東風(こちかぜ) 出舟の支度
向ふ鉢巻 玉の汗
エンサエンサの勇み肌
続く大漁で 大賑
白い砂浜 恋の夜
好いた同士の忍び逢い
彼(あ)の乙女(こ)の姿が浜千鳥
何に啼くのか 帰る雁 |
|---|--|

で「ミス神戸」が選ばれていましたから、それにならったのかもしれませんが。「ミス本庄」も「準ミス」も深江から選ばれ、オープンカーならぬトラックの荷台に載って、深江の町をパレードしました。復興祭りは「ミス本庄」を選んだ話ではありません。復興祭りに限ったイベントだったように思います。

また「復興祭り」では「渡部のおじさん」の太鼓が人気を呼びました。このおじさんは「帽子屋のおっちゃん」とも呼ばれ、胸まで伸ばしたヒゲがトレードマークでした。そのおじさん、派手な身振りで太鼓を打ち鳴らします。太鼓の響きもさることながら、その身振り手振りに観衆はやんやの喝采でした。商船学校の学生の仮装行列もあつたように記憶しています。

稲荷筋

大日神社境内の西側、深江を南北に通る道が「稲荷筋」です。この道は、阪神電車深江駅から国道2号線、森の稲荷神社の赤鳥居を過ぎてJRの鉄道ガードに至ります。赤鳥居は、戦時中B29がこの地区を空襲するときに目印としたと言われます。大きな建物もないあの時分には、上空から見ればひときわ目立つ建造物だったのです。稲荷神社は森、深江、青木の三か村共通の氏神様です。卯の花祭りには、この稲荷神社から神様が担ぎ番に当たる地区の若衆に担がれて大日神社のお旅所まで渡御されました。稲荷筋は、森の稲荷神社から神様が深江のお旅所まで渡御される道筋でした。それが稲荷筋の名前の由来です。お旅所は昭和四十三年、深江会館建築の後になくなりました。

魚屋道

深江には有馬への魚屋道があります。「ととやみち」と呼び「とと」は魚のことです。深江の浜は地引網の盛んな所でした。深江の浜で捕れた大きな魚や和歌山辺りからボンボン船で運ばれた魚が市

場で売り買いされ、生簀もありました。深江の人は大きな魚を天秤棒で担ぎ、六甲の山道を伝って有馬の温泉街に売りに行きました。生の魚だけでなく乾物のイリコも売りに行きました。深江のイリコは大正時代から宮内庁に献上して、深江の浜の名産になりました。

余談ながら、「魚屋道」の碑は初め深江駅北西の銀行の前に建立され、現在は大日神社前に移されています。いかにも稲荷筋が魚屋道のように思われがちですが、これはより多くの人の目に留まることを願って石碑を建てたもので、本当の魚屋道は札場通りでした。江戸時代の地図を見ても、札場通りが漁師町の中心で、昔から札場通りの浜先で魚の水揚げ、取引がされていました。札場通りを北に向かい、国道2号線を越えてから西に斜めに向かう稲荷神社参拝道があり、稲荷神社の西を抜けて六甲の山越えをするのが正規の魚屋道です。

深江駅南の店舗と銀幕スター

深江駅南に面して、西端に「深江書店」がありました。

本庄村には、神戸高等商船学校があり、深江書店では海事専門書が多くおかれていました。もちろん本庄小学校や中学もありましたから児童書などもそろえていました。

本屋の東に「百万ドルのエクボ」と言われた映画スター乙羽信子の家、加治家がありました。乙羽信子は鳥取県米子で生まれ幼い時に、饅頭を扱う加治家の養女になりました。彼女は近くに住んでいた同じく宝塚のスター、葦原邦子の誘いで宝塚歌劇団に入り、映画界へ移りました。「銀幕のスター」は「深江の輝く星」として、今でも深江の人の誇りです。

隣には「氷販売店」がありました。「一貫目」と注文すれば、五分か一寸もありそうな鋭い刃が並んだ大きなノコギリで切り分けてくれました。

深江銀座通りの商店

稲荷筋が阪神深江駅を南に越えて「新道」と合流するあたりまでを町の一番の繁華街という意味で「深江銀座通り」と呼びました。東側の札場通りにも店舗が点在していましたが、それらはどちらとも言えず、日常の身の回り品などを扱う「近所の店」という印象です。昭和二十九年に深江駅の北の稲荷筋沿い西側に「稲荷市場」が出来るまでは、この通りが町一番の繁華街でした。

氷店に並んで「のんきや」というパン店がありました（写真1、2）。「のんきや」の隣に寿司屋、続いて喫茶店がありました。この喫茶店は「のんきや」と親戚の方の経営です。終戦後間もない頃、コーヒーや紅茶はぜいたく品でなかなか手に入らず、この店も外国人の知り合いを通して仕入れていたそうです。

続いて三代続いた「木下理髪店」、辻を南に渡って「麻雀店」がありました。この麻雀店は深江にあった最初の麻雀店です。麻雀卓が五、六卓ほどのこの種の店としてはこじんまりしたものでした。

南隣が「井上洋品店」（写真3右側）。全体の印象は明るいモダンな感じの店でした。店内北側は全面ガラス張りのショーウィンドーになっています。中央にもふんだんにガラスを使って商品を見やすくしていました。主力商品はワイシャツなどの男性用だったようです。

洋品店の横が八百屋と呼ばれた「永田食料品店」（写真3中央）。扱う商品は今の時代と変わらないけれど、包装は全て新聞紙でした。一軒はさんで履物店。人々の日常の履物は下駄と靴が半々か、どちらかと言えば下駄の方が多かった気がします。学校へ行くのも下駄履きの子どもがいました。下駄の鼻緒は家庭でも修理でできましたが、下駄の歯が磨り減れば履物やで直してもらいました。

多田ラジオ店と街頭テレビ

深江銀座通りという呼び方は、昭和三十年代になるころには殆どが消えてしまいました。当時からあつて阪神・淡路大震災後も営業していた店が「多田ラジオ（電気）店」（表紙写真、写真4、5）です。

テレビが放映されるまでの電気商品の主力は「電球」です。この頃の電球はよく切れました。家庭での家電製品の代表は○球スーパードというラジオです。○球というのは真空管の数です。この真空管もよく切れたそうで、その取り替えも電気店の仕事でした。

当時の最大の娯楽は映画です。映画とラジオが合体したようなテレビの出現は驚きをもって人々に迎えられました。しかし、テレビは全くの高級品で、昭和二十八年の白黒テレビの値段は一七五〇〇〇円でした。公務員の初任給が八七〇〇円の時代です。庶民にとってテレビの出現は街頭テレビが始まります。プロレス、力道山が人気を呼び、プロレス中継の時間、街頭テレビの前は日本中どこでも黒山の人だかりになりました。深江の多田ラジオ店も例外ではありません。ショーウィンドーのガラスが三度割れたと伝わっています。ガラスがこれ以上割れるのは困ると、テレビを大日神社境内のお旅所（写真6）の上に置いたといえます。まるで野外映画館で、観客が大日神社の南の浜街道にまであふれる有様でした。少年は力道山見たさに夕食もそこそこ家を飛び出して、お旅所の前に座って放送を待ったものです。またラジオ店には当時正月にまとまって電気器具が入荷する初荷がありました。メーカーの法被を着た社員たちが持ち込み、店頭は電化製品で山積みになりました。

銀座通りの「ぎんざや」

多田ラジオ店の隣は「丸岡靴店」。大人の履く靴は革底でした。下駄の歯の直しがあつたように靴の革の張り替えが多かったのです。



図 昭和20年代前半の深江駅前の町並み

(深江塾・大西令子さんが作成した原図に山口咲子さんらメンバーが修正した)



写真2 のんきやと深江書店看板(同)



写真1 のんきやの昭和30年代前半の店頭
(大西令子さん収集、山口咲子さん提供)



写真6 大日霊女神社境内にあったお旅所
(当館所蔵)



写真3 井上洋品店(樹木の向う側)と永田食料品
店(写真中央)昭和30年代半ばと推定
(大西令子さん収集、多田康治さん提供)

写真7 昭和30年代のぎんざや
(大西令子さん収集、多田康治さん提供)



写真4 昭和30年前後ごろの多田ラジオ店。看板に
洗濯機が描かれている(同)



写真8 昭和40年代半ばのぎんざや。右は丸岡靴店。
交通整理をするのは丸岡増次郎氏
(大西令子さん収集、丸岡良一さん提供)



写真5 「初荷」が入荷し賑わう昭和30年代半ばの
多田ラジオ店。看板にテレビが描かれてい
る(同)

西国浜街道と深江銀座通りが交差する北角に「ぎんざや」(写真7、8)がありました。その看板はひととき大きく目立ちました。食堂であり喫茶店でありパン販売もしていました。店内にテレビが置いてあり、テレビ放送を見るために入店する人も多く、子どもたちはガラス越しに覗き見していました。テレビはこの「ぎんざや」レストランにとっては集客の貴重なツールでした。

「ぎんざや」で人々の印象に残るのは蛍光灯です。店の照明といえども白熱球が多かった時に、昼間と変わらない色でモノを見せる蛍光灯の明るさに、人々は目をみはりました。

本庄村立建物と店舗

浜街道を南に渡った角の郵便局に並んで本庄村立の連棟式二階建ての建物がありました。二階建てでしたが普通の居宅より少し棟が高かった印象があります。この建物一階が店舗で「ポンプ屋」がありました。昭和二十年代には水道はまだ一般家庭には来ておらず、井戸を利用していました。井戸からの水の汲み上げは、釣瓶が多かったのですが徐々にポンプが普及し、釣瓶と共存していました。ポンプはモーター利用ではなく手動で取っ手を上下に動かして汲み上げるものです。汲み上げた水は大きなカメ(史料館に保存展示)に入れて、使用のたびに柄杓で必要な分だけ汲んでいました。ポンプ設置や修理と言う仕事を生業とするのが「ポンプ屋」です。

銀座通りは商店が多くありましたから、銀座通りの「ハシダ文具店」は学童用文具のほか、いわゆるオフィス用品をそろえていました。「ハシダ」は後に印刷業へとその主力業務を拡大変更され、店舗の場所も変わり、高橋川東の浜街道沿いに移りました。

深江には大学から幼稚園までそろっていて文具の需要は少なくとも、本庄小学校の裏門に金星堂、南側の正門にもう一店ありました。文具だけでなく、児童の趣味的な遊び道具小物、例えば竹ひこで作

りゴム動力で飛ばす模型飛行機などもありました。

なお戦前には街道に面して学校の東側に別に三角文具店がありました。深江財産区管理会の志井保治会長と同級生だった店主が病没され、閉店しました。後に遺族が小学校に多額の寄付をされ「三角基金」として活用されています。

深江銀座通りの東筋

深江銀座通りの東側は、復興計画に基づいて拡幅工事が行われました。通りの北半分を占めていた大日神社もこのときにその敷地をずいぶん道路路として提供しました。

大日神社から浜街道を南に渡ったところに、パチンコ屋がありました。パチンコ台が壁に沿って二列に並んだ程度のこじんまりした店です。換気もよくなかったのかタバコの煙がいつぱいであった印象があります。

銀座通りに沿ってパチンコ屋の南に「松尾酒米穀店」。米や麦、各種酒、醤油、酢、油など日常生活に欠かせない食料品を扱っています。この店は精米もしていました。その頃は米や麦は台秤で量り売りが普通でした。酒や油や酢も一升ビンなどでも売っていました。サイフォンで吸い上げての量り売りがけっこう多かったのです。この頃、客はビン持参です。近所の子どもがお使いで夕方にビンを持って酒を買いにやらされることもありました。「子狸が徳利もって酒買いにやね」と言う面白い言葉も聞きました。辞書では「灘では子狸が酒蔵に住まないと、よい酒は出来ないといわれた」と記されています。灘の酒蔵のある海辺には松の林など自然も多く、狐や狸が蔵に住み着いたとしても不思議ではありません。深江にも幾つかの酒蔵がありました。

牛舎と牧場

深江銀座通りが尽きる南の端の二階に歯科医院がありました。医

院の一階は牛舎があり牛のにおいに満ちていました。銀座と医院と牛舎と言う不思議な取り合わせです。国道43号線は都市計画決定から着工まで、およそ十数年かかりました。着工まで用地はあちこちが広っぱとなっていました。深江銀座通りの南にも道路用地になる前には牧場がありました。南北五〇〇、東西一〇〇ほどであったでしょうか。この牧場では、牛たちがのんびり日を浴びて寝そべったり草を食んだりしていました。「内海の牧場」と呼ばれていました。寝そべっている牛の尻尾に触っていたらずらをした「悪ガキ」たちに、牛が怒って立ち上がったそうです。

この牛舎で子牛が生まれたとき近所の人には、その子牛がオスかメスかすぐに分かったそうです。大人の牛のなき声で分かるのです。オスの子牛は生後十日の経たないうちにどこかに売られていきます。子牛を引き離された母牛は声を上げます。母牛だけではありません。一緒にいる牛たちがみんな声を上げるのです。人間にもその牛たちの声が、悲痛な泣き声である事は分かったと言います。その牛たちの声を聞く子どもたちは、子ども心に「命」とか「親子の絆」とかを言葉ではなく肌で感じたのです。

終わりに

昭和二十年からの十年間は、わが国にとって歴史上まれに見る激動の時代でした。それはこの深江の町にとっても例外ではありませんでした。あれから六十年余の歳月が過ぎました。深江の長い歴史から見れば、六十余年前は「ちょっと昔」のことかもしれません。一方で、そのちょっと昔のことも、実際に見聞きし体験しかつそれを語れる人は、年々少なくなってきました。あらためて記録することの大切さを痛感します。

この文章は、メンバーで語りあったことや筆者の記憶を下敷きに、筆者の責任で文章にし、メンバーや志井保治会長にも見ていただき

修正を加えました。記憶違いもあるかも知れません。誤りがあれば指摘していただきたいと思います。今後ともテーマを変えて記憶の掘り起こしと記録を続けていきたいと思います。ご協力お願いします。



多田ラジオ店を経営していた多田正市氏、多田康治氏、元丸岡靴店の丸岡良一氏にも協力を得て、写真の年代特定をし、一部修正を加えました。多田ラジオ店の看板は、写真4は洗濯機が描かれています。写真5になるとテレビに変わり、わずかな時期に電化製品への憧れが変わり、それが看板にまで敏感に反映しています。また昭和四十年代になると、ぎんざの看板も様変わりし、コカ・コーラの広告が入ります。ここにも生活文化の変化が読み取れます。

なお原稿化に先立って意見を交わした深江塾のメンバーは、筆者の森口氏のほか、飯田一雄、植田延生、大西令子、寺田喜多子、西土井敏、畠信也、藤本吉江、増田行雄、三枝照於、山口咲子、吉田修三の各氏と史料館の道谷副館長、水口研究員と史料館長です。協力いただいた方に、末筆ながら厚く感謝いたします（大國正美）。

東灘区制六〇周年写真展に協力

甲南本通商店街振興組合が商店街の空き店舗を使い、二〇一〇年七月、東灘区制施行六十周年を記念パネル展「東灘のあゆみ」を開き、史料館も神戸高等商船学校の写真を貸し出すなど協力した。展示コンセプトの提案や、資料写真を検索するなど、最初から企画にかかわった。展示は一九三八年の阪神大水害の写真や新聞記事のパネル、東灘区の航空写真記事など約三〇点を展示した。

（大國正美）